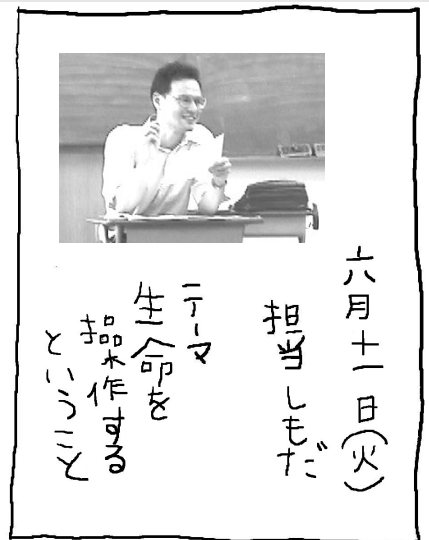


Title	生命を操作すること
Author(s)	霜田, 求
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 22-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6866
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



授業風景のビデオなど事前に与えられていたいくつかの情報から、おおよそのイメージを描いていたものの、実際に生徒たちがどういう反応を示すかは予想できなかった。「出たところ勝負でいいか」というのが正直なところだったと言ってもよい。

「生命操作」などという、高校生にとっておよそ身近な問題として考える機会もなければ、考えてみる動機も見つかりそうもないテーマを選んだのも、とくに明確な理由があったわけではない。これまでいくつかの大学で少人数(20人くらい)のセミナーを受け持ち、「現代社会が直面する諸問題」ということであるようなトピックを取り上げた際、比較的學生たちが興味を持って自分の意見を話すのが主に「生命倫理」に関する話題のときだったという経験がある。そのことはたしかに一

つの理由だったかもしれない。「なんだかよく分からないけど、世の中にはこんなこともあるのか」というくらいの関心を示す生徒が少しはいてくれるだろう、というのがこちらのささやかな期待であった。

授業の中で使用したのは、インターネット上でビジネスとして展開されている「精子バンク」と「クローン人間づくり」のウェブサイトのページ、そしてそれらに関連する特集番組のビデオである。前半は、日本国内においてインターネット上で精子バンクのビジネスを行っている「エクセレンス」というサイトと、新興宗教団体「ラエリアン・ムーブメント」が実質的な運営主体である「クローンエイド」のサイトから、それぞれ主なページをプリントアウトしたものを資料として配付し、それについて説明を加えながら、生徒から質問や感想を受けるという形で進めた。

当初の予想通りと言っていいのか、「なんだこれは」といった若干の興味を伴う反応を示す生徒と、「どうでもいいや」という感じの無反応に近い生徒とに分かれたようだ。「何か質問は?」「どういう想を持った?」といった、自由に発言を求める問いかけに回答してもらえない可能性はおそらくないだろうというこちらの「決めつけ」が、生徒の側にも伝わっていたのかもしれない。指名されない限り口を開く

ことはほとんどないし、指名されてもぼそつと一言答えるか押し黙ったまま下を向いている、というような状況だった。

とりあえず何か話してもらわないことには進まないで、無理矢理に意見を言わせるということになる。となり同士で質問内容について話しているということも何度かあったが、とにかく興味を抱いてもらうことが大事だろうと思い、しばらくザワザワすることも放任した。「沈黙に耐えられない」というようにむしろ「せつかち」な性分から、生徒が黙り続けていると、何とか答えやすいようにと次々に質問を変えていくおせっかいな教師の前に、生徒たちますます息苦しくなっていくようだった。長年教えるという仕事（塾、予備校を含めて）に従事してきたものの、こうした重苦しい事態を打開する力量に乏しいため、ひたすら時間が過ぎるのを待つという「空気」の中でほとんどなす術がない。

後半のビデオ鑑賞のときにも、集中して見ていくという状態ではなかったものの、ときどき「へえー」という感じでおもしろがっていることもあった。その後クローン人間づくりに関するアンケートを書かせて、その内容を口頭で話してもらった。それまでの経緯からやや意外だったのだが、それぞれ自分なりに考えている様子がうかがえたのでほっとしたのを記憶している。

得体の知れないもの との「出会い」？ 霜田求

「大学の先生」がやってきて「生命操作」というテーマで梅雨空のうつつとらしい日に行われた授業、それが、生徒たちにとって非日常の世界から出現してきた得体の知れないものとの「出会い」になったのだろうか、今もってよく分からない。

（しもだもとむ）